

『怒りの葡萄』における 「ビラ」の影響力

外国語学部 英語英文学科 4年

片山 美穂

はじめに

『怒りの葡萄』において、ある一枚の「ビラ」は、膨大な数の人々を動かしてしまうほどの多大な影響力を持っていた。『怒りの葡萄』を読み解くうえで「ビラ」の存在に着目すれば、人々がどれだけこの「ビラ」に翻弄されたかということが浮かび上がってくる。

1939年にアメリカで出版された、ジョン・スタインベック作の『怒りの葡萄』。今から80年ほど前に発表されたこの作品は、時代を超えて世界中の人々に読み継がれている。この作品の翻訳を手がけた訳者・大久保康雄は、この作品のことを、1930年代の最後の年に、彼の最大の傑作であり、同時に30年代アメリカ文学の代表的作品とされている長編『怒りの葡萄』(The Grapes of Wrath)を発表した。⁽¹⁾と解説している。この『怒りの葡萄』は、アメリカのジャーナリズム・文学・音楽の分野で優れた仕事をした人に贈られるピューリッツァー賞に選ばれている。さらに、1962年にはノーベル賞を受けた。このことからも、この作品がアメリカ文学において傑作であり、大作であり、出版当時大きな話題を呼んだことは明らかである。⁽²⁾

この物語は、主人公トム・ジョードの一家が、気候悪化による収穫不足と、銀行を筆頭とした資本主義の発展が重なった影響で住み慣れた土地を追われたことから始まる。仕事も家も失ったジョード一家が仕事を求め、オクラホマからカリフォルニアに向かう2000マイルという長い旅の過程と、やっとの思いでたどり着いたカリフォルニアでの過酷な労働状況を描いたものである。

この作品は単に、「登場人物たちがカリフォルニアに向かって旅をする」という話ではない。この作品が描かれた当時の、急激に変化していく中で生じるアメリカの政治・社会問題を的確に捉え、「日々

刻々と変わりゆくアメリカがこの先一体どうなっていくのか、その中で人々は一体どうやって生きていけばいいのか」という問を強く提示した作品である。この「ビラ」は、農地を追われて仕事と家を失い、途方に暮れているジョード家の人々のもとにやってきた。「カリフォルニアに行けば果物摘みの仕事がたくさんある」という宣伝文句によって彼らに希望をもたらし、カリフォルニアへの過酷な旅へと誘った。そしてこの「ビラ」を手にした他の何十万もの人々もまた、物語の主人公であるジョード一家と同じように、カリフォルニアに仕事を求めて旅に出たのであった。

まさにこの「ビラ」が、人々をカリフォルニアへと向かわせる原動力そのものとなつたのであった。

1. 「ビラ」とジョード家の人々

「ビラ」とジョード家の人々との出会いは、父親がある日「ビラ」を手にしたことにはじまる。この「ビラ」とは、黄色い紙に「カリフォルニアの農場でたくさんのお手がほしい」と印刷されたものである。「ビラ」を手にしたジョード家の人々は、これを見てどのように感じていたか。

まず、この「ビラ」を見てカリフォルニアでの生活に最も強く希望を持った人物が、トム・ジョードの祖父である。彼はカリフォルニアでの生活に対して、かなり明るい希望を抱いていた。

「…だけども、いまじゃ若いころの元気は、からっきしねえだよ。好きな時にオレンジがもげるカリフォルニアへ、早いとこ、連れていってもらいたいんだ。それともブドウかな。わしは、まだ生まれてから一度も堪能したことがなかったものが一つあるだ。うんとでっかいブドウを一ふさ、丸

「ごともぎとて、そいつを顔に押しつけて、思いきり汁を顆からたらしてみてえだよ」(上・163)

「わしらはまもなく出発するんじゃ。あっちにや葡萄があるだ。きっと道つ端にぶらさがっていることじゃろう。わしが、何をするつもりか、わかるか?わしはな、洗濯桶いっぱい葡萄を摘むだ。そして、そのなかにはいって、ぎゅうぎゅう押しつぶしてからに、ズボンのなかへ汁を流し込んでやるんじゃ」(上・181)

「わしは腹がへったよ。わしは、カリフォルニアへ行ったら、年じゅう葡萄の大きな房を手からはなさねえで、かぶりついでやるだ」(上・204)

この三か所から、祖父がカリフォルニアでの生活に大きな希望を抱いていることがわかる。なぜ彼は、土地も仕事も家も失ってしまった状態で、カリフォルニアでの未来に希望を持つことができたのか。その理由は、彼の若かりし頃の成功体験に結びつく。かつてジョード一家が持っていた土地は、祖父が若かりし時代に原住民から奪い取って耕した土地であった。祖父は、困難な状況を自らの力で突破して成功に導いたという体験をしている。この成功体験が、今の苦しい状況から脱却し、新しい生活を築くことができるという希望を抱かせているのだ。そして彼らの手元にやってきた一枚の「ビラ」に書かれた、カリフォルニアに行けば果物摘みの仕事が、高い賃金でたくさんあるという宣伝文句が、さらに彼の希望を確固たるものにしたのであった。

では、主人公トム・ジョードは、この「ビラ」をどう見ていたか。トムは「ビラ」の存在を知るよりも前に、カリフォルニア生まれの男と話をした際に、こんな話を聞いていた。

「…おれは、カリフォルニア生れの男と知合いになっただけど、やつは、そんなふうには話さなかつたぜ。…やつのいうところによると、このごろでは、あそこらでも、とてもたくさんの人間が仕事をさがしてることだぜ。そして果物を摘む家族たちは、きたねえ古ぼけたキャンプに住んでて、食うのがやっとだってことだよ。賃金は、とても

安いし、第一、賃金をもらうのがよういじゃねえそうだ」(上・179)

この過酷な現実を聞かされた以上トムは、家族に一言、「カリフォルニアに行ったところで、そんなに現実は甘くはない」と忠告をしてもおかしくない。しかしトムは、以下の母親の話をすっかり間に受け、家族とともにカリフォルニアを目指して旅に出たのであった。

「お父さんが黄色い紙に印刷してある広告ビラをもらったんだけど、それには、とっても人手をほしがってると書いてあったよ。もしそこに仕事がたくさんないんなら、そんなめんどうなことをするはずがないじゃないか。そんな広告を出すにしたって、ずいぶんお金がかかるんだからね。何のために、そんな嘘をつくの?嘘をつくのに、たくさんの費用をかけるかね?」(上・179)

このように母親は、カリフォルニアの男からカリフォルニアの現状を実際に聞いたというトムの言葉よりも、父親がもらってきた「ビラ」に書かれていることを信じてしまう。息子であるトムの話よりも彼女の心をとらえて離さなかったもの、それがまさに「ビラ」の宣伝文句なのであったのだ。また、トムも、母親の「嘘をつくのにお金をかけるのか」という考え方方に賛同したのであった。

さて、「ビラ」をもらってきた当の父親はどう思っているのか。父親は、この「ビラ」の宣伝文句を見事に信じ切っている。そのことは、ウィルソンというのちにジョード一家とともに旅をすることになる男との会話からはっきりとうかがえる。

…ウィルソンが言った。「そうだとも。わしは広告ビラで見たんだけど、向うじゃ、えらく果物摘みの人手をほしがってるだ。とてもいい賃金でな。…それに、あんなに賃金が高えだから、自分でも小さな土地持てるようになって、現金を稼ぐこともできるようになるだ。そうさ、まったく、二年もすりや、きっと誰だって自分の土地持てるようになるだよ」

父親が言った。「わしらも、そんなビラを見た

だよ。一枚、ここにも持ってるだ。」彼は財布をとり出し、折りたたんだオレンジ色のビラを出して見せた。黒い活字で、こう書いてあった。『カリフォルニアで豆摘み人募集。四季を通じて賃金よし。豆摘み人を八百人募集』

ウィルソンは、それを不思議そうにながめた。「おや、そいつは、わしが見たやつと同じもんだぞ。どうだろう一向うじや、もう八百人とっちまつただろうかね？」

父親が言った。「これはカリフォルニアのほんの一部だ。あそこは、おまえさん、アメリカでも二番目に大きな州だて。たとえ、その八百人がいっぱいになったとしても、ほかに土地は、いくらでもあるだよ。…」（上・288,289）

この会話から、父親とウィルソンを比較することができる。同じ「ビラ」を見てカリフォルニアを目指す人間に出会ったウィルソンは、カリフォルニアにはもう人手は必要ないのかもしれない不安を感じ始める。一方で父親は、カリフォルニアでの生活がうまくいくと信じて疑わない。カリフォルニアに行きさえすれば仕事にありつける。きっとこの苦しい生活を立て直して、また新たな人生のスタートを切ることができる。一枚の「ビラ」が父親に、そしてジョード家の人々に、希望の地カリフォルニアへの憧れと確信をもたらしたのであった。

2. ぼろ着の男との出会い

ジョード一家はカリフォルニアに向かう途中、様々な人々に出会う。彼らが出会った人々の中で、カリフォルニアから引き返す人物の一人が「ぼろ着の男」である。彼との会話は、ジョード一家の再帰を夢見る希望の旅にはじめて不安要素を投下した、物語全体を通して重要な場面である。

ぼろ着の男は父親が話しているあいだ彼を見つめていた。それから笑った。…「おまえさんは向うへ行くつもりかいへっ、ばかばかしい！」（上・369）

ぼろ着の男は、のろのろと言った。「おれは一お

れは帰り道なのさ。あそこにいたんだよ」（上・370）

ぼろ着の男は父親の怒った目を見おろした。…「ビラが正しいだよ」と彼は言った。「向うでは人手をほしがってるだ」

「そんなら、なぜおめえさんは、笑ったりしてからに、わしらを変な気にさせるだね？」

「なぜって、おめえさんは向うがどんな人間をほしがってるか知らねえからさ」

「ビラ」を信じてカリフォルニアへと旅立ったこの男は、「ビラ」とはあまりにもかけ離れた悲惨な現実に耐え切れず、カリフォルニアを後にする。この男には、ジョード一家とは違って、帰る家がある。彼はジョード一家に帰る家がないということを知ると、ジョード家の旅を無理やりやめさせようとはしない。自分が見てきたカリフォルニアの現実を語るもの、彼は父親とトムに、自分の目で確かめるがいい、という考えを示している。この男は、自分にはジョード一家を引き止める権利もなければ、彼らを引き止めたところでどうにもならないことを悟っているのだ。もう一つ、このやりとりで注目すべき点はやはり、未だ父親が「ビラ」を信じて疑わないということである。父親は男に何を言われてもなお、粘り強く「ビラ」を信じ切ってしまっている。ジョード一家に残された希望はただ一つ、この「ビラ」に書かれている通り、カリフォルニアで果物摘みの仕事をして生きていくことなのだ。

父親のように、「ビラ」を信じることでしか苦しい状況を耐え抜く術が得られないという危機的状況が、「ビラ」を信じる人間をより多く生み出してしまったといえる。

3. 一枚のビラが大量にばらまかれた本当の理由

3-1. 現実を目の当たりにしてきた人々の見解

それでは、ジョード家の人々が抱えていた「ビラ」に対する疑問の答えが示されている部分を見ていく。ジョード家はカリフォルニアに着いて、移住労働者がともに野外で暮らすキャンプ生活に身を投じた。このキャンプで出会った人々からの話を通して、

『怒りの葡萄』における「ビラ」の影響力

この「ビラ」が単純に労働者を募るだけのものではなくなってしまった仕組みが解き明かされることとなる。

トムは言った。「故郷のほうで、広告ビラを撒いてたやつがいただよ—オレンジ色のビラさ。ここじゃ畑の作物採取に、うんと人手がいるってかけてあった」

若い男は笑った。「なんでも、おれたちみてえな百姓が、三十万人も、こっちにいるそうだぜ。ところが、どの家族も、そのビラってやつを見るだ」

「そうだな。だが、もし人手がいらねえものなら、なんだってそんな余計な手数をかけるんだろう？」

「すこし頭を使えよ。なぜおまえは頭を使わねえんだい？」

…「まずお前が人にやらせる仕事を一つもってるとする。そして、仕事をほしがってるのは、一人きりだとする。すると、おまえは、その男に、いうなりの賃金を払 わなきゃなるめえ。ところが、これが百人いるとしてみねえ」（下・14、15）

「桃が実ったときには、二週間ほど、三千人の人手がいるだ。どうしてもそれだけ雇わねえと桃が腐っちゃうだ。それで、やつらはどうすると思うだがね？ そらじゅうに広告ビラを撒くのさ。入用なのは三千人だが、六千人の男が集まるだ。やつらは、払いたいだけの賃金で、その男たちを雇うだ。やつらのいう賃金ではいやだといえば、勝手にしろだ。そいつの代わりに働くと待ちかまえてるやつが千人もいるだからね。そこで、採るわ、採るわ、たちまちすんじまう。このへん一体は桃の産地だで、みんな、いちどきに熟すだ。おまえが、もいでるあいだに、ほかのもの、みんなもがれてるんだよ。このへん一帯、ほかにや何も仕事はねえだ。それがすんでしまえば、農場主は、誰にもここにいてもらいたくねえ。三千人みんなよ。仕事は終わった。…」（下・16、17）

膨大な人々をカリフォルニアへと誘ったこの「ビラ」とは、単にカリフォルニアでの果物摘みの仕事

に就く人を集めるものではなくなっていた。仮に200人の労働者が必要だとしたら、雇う側は500人の移住労働者にその話を持ちかける。すると、それを知った500人の仕事を探している人々が、同じように仕事を探す人々にその話を広め、その人たちの家族なども含めたら、この仕事をしたがる人間はあっという間に1000人にも膨れ上がる。200人の5倍の人数が集まつた雇い主は、格安の1時間20セントで働いてもらうと話を変えてしまう。そこで、集まつた1000人のうちの500人は「やっていられない」とその申し出を断るが、残り半分の500人は、何としてでもお金を稼がなければという気持ちから、その要求を受け入れてしまう。この広告が果たす役割とは、「提示した賃金で定員の200人の労働者を集める」ことではなく、「提示した賃金よりもはるかに安い賃金で働かせることのできる、200人よりももっと多くの労働者を集める」ことなのであった。こうして、「ビラ」を信じて旅に出た人々は、カリフォルニアの現実を知り、さらにこの「ビラ」の本当の意味を知った。移住労働者たちに、カリフォルニアに行って果物摘みの仕事をすれば今の苦しい状況から脱却できるという希望を与えておきながら、ひどく労働者を苦しめた「ビラ」。農場主たちがさらに低い賃金で移住労働者を雇うことができるようになった理由は、「ビラ」を募集定員の200人よりもはるかに多くの人々に向けて発行したからであった。

3-2. ビラを発行した側の人々の思惑

先ほど述べたように、「ビラ」を作った側の人間が求めていることは、最低の賃金でどれだけの人間を働かせ、いかに自分たちの利益を膨らませることができるのかということである。彼らに、移住労働者たちの生活のことまで考えている余裕などない。彼らは、彼ら自身の生活をいかに豊かで余裕のあるものに向上させていくことができるか、そのことしか考える余裕がないのだ。この考え方には、移住労働者が自分の生活を立て直そうとカリフォルニアにやってくるのと同じ原理である。彼らは「ビラ」を利用したのだった。大した努力をせずとも、ほしい人数よりも多くの枚数の「ビラ」を作つてばらまくだけで、たくさんの労働者を安い賃金で働かせるこ

とができたのだ。彼らにとって「ビラ」をばら撒くという行為は、彼らの目的を達成するためのひとつの手段でしかない。実際に労働者を雇う際に記載した通りの賃金を払う気が無いとしても、自分たちの利益のためには嘘も真も関係ない。高い賃金を提示しなければ、人手を集めることは簡単にはできないのだから。

4. ビラとは違う現実

ここまで「ビラ」について、様々な立場から考察を重ねてきた。カリフォルニアでジョード一家を待ち受けていたのは、「ビラ」を信じて目指したものとは正反対の世界であった。

トムが言った。「おれたちも故郷「を出る前には、こっちへくれば仕事はたくさんあるときかされただ。百姓の出稼ぎを歓迎するという広告ビラをみてよ」

「そうだとて」とティモシーが言った。「わしたちも、見ただよ。ところが仕事はたいしてありやしねえ。賃金は下がる一方だ。…」(下・109)

実際のカリフォルニアは、仕事を求めてやってきた移住労働者で溢れかえり、その中で仕事を得ることすら困難であるという状況であった。仕事を欲しがる人々が仕事に必要な人数を大幅に超えてしまったことで、移住労働者に対する賃金は下がっていく一方となる。「ビラ」によって集まった移住労働者たちは、結果的に互いを苦しめ合う存在と化してしまっていたのだ。

結

ここまで、『怒りの葡萄』で描かれている一枚の「ビラ」を、多くの移住労働者をカリフォルニアへと動かした原動力として捉え、「ビラ」が持つ影響力について考察した。

今日のように膨大な情報が錯綜する時代を生きる人間は、世の中に広まっている情報の全てが正しいとは思っていない。間違った情報が流れることがあるということを十分にわきまえたうえで、正しい情

報・間違った情報と、情報を選び取っている。しかし、この『怒りの葡萄』の舞台となった時代は、正しく有益な情報を選び取るということが、一般の人々にとって容易にできた時代ではない。

この『怒りの葡萄』という小説を、主人公トム・ジョードの旅物語としてとらえるだけでなく、「ビラ」がジョード一家を、そして、その当時の人々をカリフォルニアへと動かしたととらえて読み返せば、「ビラ」が与えた影響の大きさを改めて感じる契機となるに違いない。

一般注

『怒りの葡萄』からの引用は、すべて大久保康雄訳『怒りの葡萄(上)』(新潮社・1967年)、『怒りの葡萄(下)』(新潮社・1967年)からの引用である。引用文の文末にページ数のみを記した。

参考文献

- (2) 亀井俊介『アメリカの旅の文学—ワンダーの世界を歩く』(昭和堂、2009)
- (3) スタインベック著 大久保康雄訳『怒りの葡萄』(新潮社、1967)
- 中山喜代市『ジョン・スタインベック』清水書院 2009年
有木恭子、加藤好文編著『スタインベックを読みなおす』開文社出版 2001年